

社会科学の哲学の将来を考える

吉田 敬 (Kei Yoshida)

東京大学

この発表の目的は日本における社会科学の哲学の過去と現在を踏まえて、将来を考えることである。社会科学の哲学が世界的に見ても、科学哲学の傍流であることは認めざるをえない。しかし、英語圏では過去数十年に渡る研究の蓄積があり、近年ヨーロッパでも **European Network for the Philosophy of the Social Sciences** の創設やフィンランド学士院が **Center of Excellence in the Philosophy of the Social Sciences** を設置するなど、様々な動きが起こっている。ところが日本では、多少の変化はあるものの社会科学の哲学はほとんど見向きもされない状況が続いているとって差し支えないだろう。

それでは、日本では社会科学の哲学にそもそも関心が持たれなかったのかというと、決してそうではない。例えば、リチャード・ラドナーの『社会科学の哲学』が翻訳出版されたのは、原書出版から2年後の1968年のことである。国際誌 *Philosophy of the Social Sciences* がカナダで創刊されたのは1971年である。そしてピーター・ウィンチの『社会科学の理念』が翻訳出版されたのは1977年である。このような状況から、少なくとも1970年代半ばには日本においても英語圏と時を同じくして社会科学の哲学が発展する土壌が存在していた。ところが、1980年代以降一部の例外を除けば、日本で社会科学の哲学が発展したとはいえない。

このような状況を引き起こしていた理由はいくつか考えられるが、その中でも重要だと思われるのがドナルド・デイヴィドソンの論文「概念枠という考えそのものについて」(1974)の影響力である。この論文は日本のみならず、英語圏においても、社会科学の哲学の発展に対して大きな影を投げかけるものであった。例えば、社会科学の哲学における代表的な論争の一つに、異文化の合理性を主題とした合理性論争があるが、これはそもそも人類学の研究上の問題を扱うものであった。しかし英語圏では、この問題は特にデイヴィドソン論文以後、人類学の知見は無視して、あたかもクワインやデイヴィドソンの主張に関する哲学的議論だけを検討していればよいかのように考えられてしまった。これは社会科学の哲学が自他共に認めるように、科学哲学、ひいては英語圏の哲学における傍流であることと無関係ではないと思われる。つまり、現代の代表的な哲学者が論じているのだから、そちらを参照すれば十分で、何もわざわざ社会科学あるいはその哲学を相手にする必要などないというわけだ。日本にもそのような雰囲気があったのではないかと推測すると、日本で社会科学の哲学が発展しなかったことについてもそれなりに説明がつくように思われる。

それではこのような状況の中で、日本において社会科学の哲学の将来をどのように考えればよいのだろうか。月並みな答えではあるが、それはやはり社会科学の知見を踏まえて、地道に研究を進めていくしかない。現代を代表する哲学者の議論に注目す

ることはたしかに重要である。しかし、それは哲学ではあっても、社会科学の哲学ではない。社会科学の哲学であるからにはやはり、社会科学において生じてくる哲学的な問題を扱う必要がある。たしかに、哲学と社会科学のどちらについても知らなくてはならないというのは容易なことではない。しかしそれができなければ、デイヴィドソン論文以後のような状態を繰り返すだけであって、日本において社会科学の哲学に将来など存在しないだろう。